

**ピント** 創作のプロセスではいつも、新しい〈土地〉を見つけたい、新しい〈場所〉を見つけたいと思っています。真太郎と開次はまさにそれをもたらしてくれました。彼等が入ったことで、動きのリサーチのうえでは若干いつもとやり方が違ったかもしれません。とっても美しい身体による対話が生まれたのです。そこにはさまざまなアイデア、動きの言語、ダンス・スタイルの交換がありました。私たちはオープンな状態で彼等が運んで来てくれたものを受け入れようとしてしまし、彼等にも私たちから何かを受け取ってもらう。それらが素晴らしく溶け合う中で、新しいスタイルや動きが生まれてきたのです。新しい〈土地〉、新しい〈場所〉に行き着いたように感じます。作品を創る時はいつでも、前と同じ場所で足踏みをしないように、同じような世界に留まらないようにと心に決めて取り組みます。新たなドアを開けて踏み出すというのは、まるで暗室に足を踏み入れるようなものです。そこに今まで見たことのない光を探すのです。

**観客** 砂が袋から落ちてきて傘に当たるのが雨のように感じられて印象的でした。最後に天井から降ってきたタンポポの綿毛のようなものも幻想的。これらが生まれたきっかけやそれに込めた思いなどをぜひ聞かせてください。

**ボラック** 僕たちは、人に感じてもらうということが、人に考えさせることよりも更に大きな仕事だと思っています。この舞台の中には動きもあるし、音楽もあるし、視覚的にもいろいろな要素を使っていますが、それは皆さんの情感や気持ちを広げてもらうためのツールだと思っています。この砂袋に関しても、ただの砂袋ではなく、例えば刻々と時を刻む砂時計にもなるかもしれない。砂袋は、もしかしたらですが、人がぶら下がっているように見えるかもしれない。モノが人に見えたり、人がモノに見えたり。いろいろな二重性が今回の舞台には含まれています。砂が落ちる音もそうですし、それから黒い細い糸のように落ちる光景も、それが人生を刻んで、だんだんと命を刻んで…というふうにも考えられるし、新しい命を生みだしているのかもしれない。すごくシンプルなモノや行為から、いろいろなことを考えたり感じたりしてもらうことが、僕たちの目的でもあるのです。



2007年11月大ホール公演「Hydra ヒュドラ」より

【振付・演出・衣装デザイン・舞台美術デザイン】インバル・ピント&アヴシャロム・ボラック  
【出演】インバル・ピント・カンパニー（10名）大植真太郎 森山開次  
【日時】2007年11月9日（金）～11日（日） 全3公演

今後のツアー予定：2008年4月 Steps インターナショナル・ダンス・フェスティバル（スイス）  
5月 イスラエル・フェスティバル2008



profile: Inbal Pinto & Avshalom Pollak（インバル・ピント & アヴシャロム・ボラック）

インバル・ピントとアヴシャロム・ボラックは、イスラエルを代表するコンテンポラリー・ダンスの振付家・演出家。インバル・ピント・カンパニーを率い、『オイスター』（1999年）、『プーベーズ』（2002年）等、革新的で想像力豊かな傑作を発表し続け、世界でもトップクラスの人気を集めている。一昨年の来日公演は、NHK 教育「芸術劇場」でも放送され反響を呼んだ。インバル・ピントは、グラフィック・デザインを学んだ後、バットシェバ舞踊団に参加し、ダンサー・振付家として活躍。92年にアヴシャロム・ボラックと出会いカンパニーを結成。『Wrapped』（98年）で、ベッシー賞を受賞。カンパニーとしての活動以外にも、オペラや演劇の振付も行っている。アヴシャロム・ボラックは、俳優として数多くの映画やテレビに出演するとともに、シェイクスピアやチャー・ホフの舞台にも出演。インバル・ピントとカンパニーを結成して以来、全ての作品を共同で創作している。07年11月影の国さいたま芸術劇場との国際共同製作で『Hydra ヒュドラ』を発表、大きな話題を集めた。

トーク会場撮影：宮川舞子 舞台撮影：Arnold Groeschel